

中国環境ガバナンスにおける環境 NGO の新局面と今後の課題

—若い世代が牽引する新しい環境 NGO の光と影—

LENG XINYUAN

中国では、改革開放後、都市化や工業化が躍進することにより、大きな経済成長を遂げている。その一方で、「負の奇跡」とも呼ばれているように、水汚染、大気汚染などを典型とした自然の破壊としての代価が生じてきた。

近年、環境問題が益々深刻化し、広く社会の注目も集めるようになり、従来の政府主導の解決方式の改善は、各方面から要請されるようになった。とりわけ、市民から自発的に生じたものとして、1994 年から「自然の友」の立ち上げをはじめ、環境 NGO は、徐々に成長しつつあり、中国の環境ガバナンスの構築に大きな役割を果たしていると考えられる。

第一世代の環境 NGO は社会的エリート層によって成立し、カリスマ性が強いといわれ、怒江ダム反対運動で見られたように、リーダーの社会関係網により党や政府に入り込んで、いわゆる「体制内の参加」の形をとっていた。従って、この世代の環境 NGO の参加はリーダーの個人関係(中国語:人情、関係)というインフォーマルな要素によって左右されるものであった。

さらに、2008 年四川大地震後には、80.90 年代生まれの多くの若者が NGO 界に躍進している。一方、中国社会では、社会関係網を使って物事を進めることが、強く定着している行動原理であるとされる。そこで筆者は、相対的に資源が不足する若者世代が牽引する環境 NGO の参加については、これまでの「人情」や「関係」などに限らない新たな影響要素を導きだして、今後の参加の促進を描いていくことが重要になると考えた。

これまでの中国 NGO に関する先行研究では、主に国家—社会という枠組みの中で、市民社会理論やコーポラティズムなどのアプローチを用い、政府と NGO との関係に着目して論じる傾向が見られた。しかし、市民社会やコーポラティズムの分析枠組みで一定程度解釈できるものの、中国のこうした複雑な現状では、全体像を包括的にカバーすることは難しいと筆者は考えた。

そこで、本論文では、従来の国家—社会関係の枠組みを超えて、他のステークホルダーとの関係を含む環境ガバナンスという視角から分析を試みた。すなわち若者が支える新しい環境 NGO を研究対象として、環境ガバナンスにおける他主体との関係の中に位置づけながら考察を行っていく。まず事例研究では、環境 NGO の新たな展開を考察して、「告発型」と「協働型」に類型化した。さらに環境 NGO で従事する経験のある 80.90 生まれの若者たちライフストーリー調査を通じて環境 NGO に投身する主体性を生活経歴の形成過程に着目して分析した。

本研究の結論として、「専門環境保護者(専門環保人)」と自称している彼らは、第一世代より超越した専門性があり、具体的な実践能力を備えていることが認められた。その一方で、若い世代の語りの中で顕れていた「無力感」にも着目する必要があると考えられた。その背後には、生活の質、政府上の発言権といった脱物質主義に傾いている 80.90 年代生まれの若者と物質主義を追求するそれ以前の世代とギャップが象徴的に顕れていることが示唆された。さらには、計画経済体制から定着されている政府主導という伝統思想の作用が働いているゆえに、環境 NGO の若者世代は、常に脆弱な社会基盤の中で戦っていることが明らかになった。

最後に本研究を総括して、中国の環境ガバナンスを展望した。現状からみれば多くの部分が政府の意向に依存度が高く、また党と政府は西洋勢力の挑戦へ対処する姿勢が現れ、「市民社会」という概念への

排除や海外の NGO の活動に規制するなど、現実には環境 NGO の成長や参加には一定程度阻害要因としていまだ立ちはだかっていることが示唆された。(環境行動学)